

平成25年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

丸 潟 遺 跡
中 沢 遺 跡

2014

新潟県加茂市教育委員会

平成25年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

丸 瀧 遺 跡

中 沢 遺 跡

2014

新潟県加茂市教育委員会

序

山紫水明の地「北越の小京都」加茂市には、その豊かな自然に育まれた約2万年前からの悠久の歴史が地下に埋蔵文化財として存在しています。これまでに、175か所が遺跡登録されています。

加茂川の上流部の七谷地区にところどころ見られる河成段丘上には、旧石器時代や縄文時代の遺跡が多く確認されています。中大谷にある丸山遺跡は二万年前旧石器公園として平成18年に整備され、市民の皆様から憩いの場として親しまれています。また、加茂川と下条川下流域の一面平らな水田の下からは弥生時代～平安時代の遺跡が多く発見されています。丘陵上には古墳も確認されています。市内の各所に先人たちの営みがあり、貴重な文化財が埋蔵されています。

現代の私たちは様々な開発事業を計画する中で、埋蔵文化財との関わりを無視することはできません。遺跡が工事によってやむを得ず破壊される場合は、発掘調査を行って記録保存し、後世に引き継ぐ責務があります。

本書はそうした開発事業と文化財保護との調整をするために行われた試掘・確認調査の結果報告書です。平成25年度には、2遺跡において調査を行いました。いずれも小規模な調査で、目を見張るような成果があるものではありませんが、各地域における歴史資料として、今後活用されることを願っています。

このたび、本書を刊行することで、当地域の学術・研究資料または郷土を理解するための教材として多くの皆様に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護思想が深まれば、この上なく幸せであります。

最後に、発掘調査に対して様々なご指導とご協力を頂いた新潟県教育庁文化行政課、並びに確認調査に参加された地元の方々、地権者および工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成26年9月

加茂市教育委員会

教育長 殖 栗 敏 夫

例 言

- 1 本報告書は、平成 25 年度に新潟県加茂市内の各種開発に伴い実施した 2 遺跡における試掘・確認調査および工事立会い調査の記録である。
- 2 調査は丸瀧遺跡が道路建設工事、中沢遺跡が排水路改良工事と民間開発に伴い実施したものである。
- 3 試掘・確認調査の経費は、国庫および県費の補助金交付を受けた。
- 4 調査は加茂市教育委員会が主体となり実施した。調査体制（平成 25 年度）は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教 育 長	殖栗 敏夫
総 括		社会教育課長	金子 正文
庶 務		社会教育課主査	石井美代子
調査担当		社会教育課係長	伊藤 秀和
現場作業員	石田 卓・千葉泰行・中川賢一・中野郁雄 (公益社団法人加茂市シルバー人材センター会員)		
整理作業員	櫻井恵美子		
- 5 調査記録図面・写真類、出土遺物は一括して加茂市教育委員会が保管している。
- 6 本書で示す方位はすべて真北である。
- 7 挿図に使用した既存図面については、その出典を記した。
- 8 本書に掲載した遺物は各遺跡毎に通し番号を付し、本文及び観察表・挿図図面・写真図版の番号はすべて同一としている。
- 9 写真図版 1、4 の調査地遠景写真は、それぞれ平成 10 年と平成 13 年の本調査に伴い撮影したものを使用した。
- 10 引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載している。
- 11 本報告書の執筆と編集は、第 VI 章については（株）パリノ・サーヴェイに試料を委託し、同社より原稿を頂いた。そのほかの執筆と編集はすべて伊藤秀和が行った。
- 12 土器の写真撮影、挿図、写真図版の版組みおよび全体のデジタル編集・データ化は、（有）不二出版に委託した。
- 13 土器（一部）の写真撮影、木製品の写真撮影および実測は、フォーカルに委託した。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。（敬称省略・五十音順、機関などは順不同）

池野芳男・小熊博史・春日真実・滝沢規朗・立木宏明・山崎完一
ソフトバンクモバイル（株）・星野電気（株）・（社）加茂市シルバー人材センター・小柳建設（株）
（株）ジョブ・加茂郷土地改良区・加茂市建設課・新潟県教育庁文化行政課・新潟県三条地域振興局
加茂市文化財調査審議会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 平成 25 年度事業の概要	1
2 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 道路建設工事関連	3
1 調査に至る経緯	3
2 丸瀉遺跡	3
(1) 遺跡と確認調査の概要	3
(2) 層 序	5
(3) 遺構と遺物	5
(4) 調査のまとめ	5
第Ⅲ章 農業基盤整備事業関連	7
1 調査に至る経緯	7
2 中沢遺跡	7
(1) 遺跡と確認調査の概要	7
(2) 層 序	7
(3) 遺構と遺物	9
(4) 調査のまとめ	9
第Ⅳ章 民間開発関連	10
1 調査に至る経緯	10
2 中沢遺跡	10
(1) 遺跡と工事立会い調査の概要	10
(2) 遺構と遺物	10
(3) 調査のまとめ	10
第Ⅴ章 丸瀉遺跡の自然科学分析	12
1 はじめに	12
2 試 料	12
3 分析方法	12
(1) 放射性炭素年代測定	12
(2) 樹種同定	13
4 結 果	13
(1) 放射性炭素年代測定	13
(2) 樹種同定	13
5 考 察	14
第Ⅵ章 ま と め	16
《引用・参考文献》	17
《別 表》	18
《報告書抄録》	巻末

挿図目次

第 1 図	調査対象遺跡位置図……………2	第 7 図	中沢遺跡確認調査トレンチ土層柱状図……9
第 2 図	丸瀉遺跡推定範囲と確認調査トレンチ・ 立会い調査対象地位置図……………4	第 8 図	中沢遺跡出土遺物……………9
第 3 図	丸瀉遺跡確認調査トレンチ土層柱状図……5	第 9 図	中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図…11
第 4 図	丸瀉遺跡出土遺物……………6	第 10 図	中沢遺跡出土遺物……………11
第 5 図	中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図……8	第 11 図	暦年較正結果……………13
第 6 図	中沢遺跡確認調査トレンチ位置図……8	第 12 図	木材……………15

表目次

第 1 表	平成 25 年度発掘調査工程表……………1	第 4 表	放射性炭素年代測定および暦年較正結果…13
第 2 表	丸瀉遺跡調査履歴一覧表……………3	第 5 表	樹種同定結果……………14
第 3 表	中沢遺跡調査履歴一覧表……………8		

写真図版目次

写真図版 1	【丸瀉遺跡】			
	調査地遠景（南東から）	調査地近景（北西から）	調査地近景（南東から）	
	13 トレンチ調査風景（北西から）	16 トレンチ調査風景（南東から）		
写真図版 2	【丸瀉遺跡】			
	13 トレンチ土層断面（南東から）	13 トレンチ深掘り土層断面（南東から）		
	14 トレンチ土層断面（南西から）	15 トレンチ土層断面（南東から）	16 トレンチ土層断面（北西から）	
	調査地近景（南東から）	調査風景（北から）	調査風景（北から）	
写真図版 3	【丸瀉遺跡】			
	出土遺物			
写真図版 4	【中沢遺跡】			
	調査地遠景（南東から）	1～6 トレンチ調査地近景（南西から）		
	7～12 トレンチ調査地近景（南西から）	2 トレンチ調査風景（西から）		
	9 トレンチ調査風景（南西から）			
写真図版 5	【中沢遺跡】			
	1 トレンチ土層断面（南西から）	2 トレンチ土層断面（北西から）	3 トレンチ土層断面（南東から）	
	4 トレンチ土層断面（南東から）	5 トレンチ土層断面（南東から）	6 トレンチ土層断面（南東から）	
	7 トレンチ土層断面（北西から）	8 トレンチ土層断面（北西から）		
写真図版 6	【中沢遺跡】			
	9 トレンチ土層断面（北西から）	10 トレンチ土層断面（北西から）	11 トレンチ土層断面（北西から）	
	12 トレンチ土層断面（北西から）	出土遺物		
写真図版 7	【中沢遺跡】			
	調査風景（南から）	調査風景（南から）	調査風景（南から）	
	調査風景（南西から）	出土遺物		

第 I 章 序 説

1 平成 25 年度事業の概要

加茂市の遺跡調査の起点は、平成 7 年に新潟県教育委員会主催で実施された詳細分布調査である。それまで空白地帯であった沖積地から遺跡が多数発見され、これまでに把握された遺跡は 175 となった。

詳細分布調査直後の平成 8 年頃から、特に下条地区の沖積地で国道 403 号三条北バイパス建設工事や吉津川地区県営ほ場整備事業などが計画され、試掘・確認調査を経て馬越遺跡に代表されるような大規模な発掘調査が行われた。

昨今ではそれらの大規模な発掘調査と整理作業と報告書刊行も完了しており、発掘調査で得られた考古資料の保存・管理・活用が課題となっている。

なお、市内の試掘・確認調査事業については平成 7 年度から国庫補助事業として開始しており、各種の開発事業との調整をするうえで重要な位置を占めている。今後も小規模であっても市内各域で計画される開発行為をできるだけ早期に把握し、精度の高い効率的な調査を実施していくことが求められる。

平成 25 年度の試掘・確認調査は、埋蔵文化財包蔵地内での開発事業が少なく、新規に把握した事業もわずかであった。昨年度からの継続や確認調査結果を踏まえての対応が主であった。試掘・確認調査（工事立会い）は公共工事 1 事業、民間開発 1 事業に関係し、2 遺跡を対象とした。

丸瀧遺跡が県の道路建設事業、中沢遺跡が農業排水路改良工事と携帯電話鉄塔建設工事を調査原因とした。上記の調査のほか、平成 25 年度には平成 24 年度加茂市内遺跡確認調査報告書を刊行した。

遺跡名・地区名	調 査	調査原因	遺跡の 主な時代	月 ※現場調査期間												備 考	
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
丸 瀧 遺 跡	確認・工事立会い	道路建設	古 墳	■								■		■			
中 沢 遺 跡	確認・工事立会い	排水路改良	弥生～中世								■					■	
	工事立会い	携帯鉄塔建設	弥生～中世			■											

第 1 表 平成 25 年度発掘調査工程表

2 遺跡の位置と環境 (第 1 図)

加茂市は新潟県のほぼ中央の県央域に位置し、中越地区に含まれる。地勢は東部に高さ 1,000m を超える粟ヶ岳、権ノ神岳などの山岳が聳え、粟ヶ岳を源とする加茂川が大谷川、高柳川などの支流を集め、谷底平野を縦貫し、加茂新田地区で信濃川に注ぐ。流域延長は約 11km である。

加茂川上流部は「七谷」地区と呼ばれ、加茂川およびその支流が小規模な段丘を形成し、旧石器時代～縄文時代の遺跡が多く分布する。一方、弥生～古代の遺跡はほとんどなく、中世では小規模な山城や信仰関連遺物が多く確認される。加茂川が東山丘陵を抜けた市街地域には扇状地形が形成され、弥生時代後期後半頃に開発が開始される。沖積地では古墳時代前期に開発が進行し、その後若干の空白期間をはさんで、奈良・平安時代の遺跡が多く確認されている。

丸瀧遺跡 (1)、中沢遺跡 (2) はそれぞれ加茂川左岸域と下条川右岸域の沖積地に位置する。丸瀧遺跡

2 遺跡の位置と環境

は加茂川・下条川・信濃川に囲まれた平野のほぼ中央にある。中沢遺跡は東山丘陵から緩やかに張り出す扇状地の先端部～沖積地にかけて広がる。



第1図 調査対象遺跡位置図 (S=1:50,000)

(国土地理院 平成17年発行〔加茂〕・平成9年発行〔新津〕 S=1:50,000 原図)

第Ⅱ章 道路建設工事関連

1 調査に至る経緯

国道403号三条北バイパスの横断地下道建設工事に伴う丸瀉遺跡の確認調査と工事立会い調査を行った。

本件については、かなり以前から埋蔵文化財の取扱い協議が行われてきたが、用地買収が進まず、先送りになってきた経緯がある。調査は平成23年度末に用地買収が終了した区域を調査対象として、平成24年度に確認調査を実施した。今年度実施の調査はその際に用地未買収であった区域を対象とした。

事務的な手続きは以下のとおりである。まず、平成25年4月4日付け三振地第12号で埋蔵文化財発掘の通知が三条地域振興局長から市教委に提出された。それを受けて、市教委は平成25年4月12日付け民資第58号で埋蔵文化財の発掘について、確認調査が必要との意見を付し、新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、周辺の農作業の状況を勘案しながら調査時期を検討し、埋蔵文化財発掘調査の報告を平成25年5月2日付け民資第75号で新潟県教育委員会教育長宛てに行い、調査の準備に入った。

なお、前年度の確認調査の結果を踏まえた灌漑管敷設工事に伴う工事立会いを4月上旬、11月上旬と1月中旬に行った。

2 丸瀉遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要（第2図・第2表）

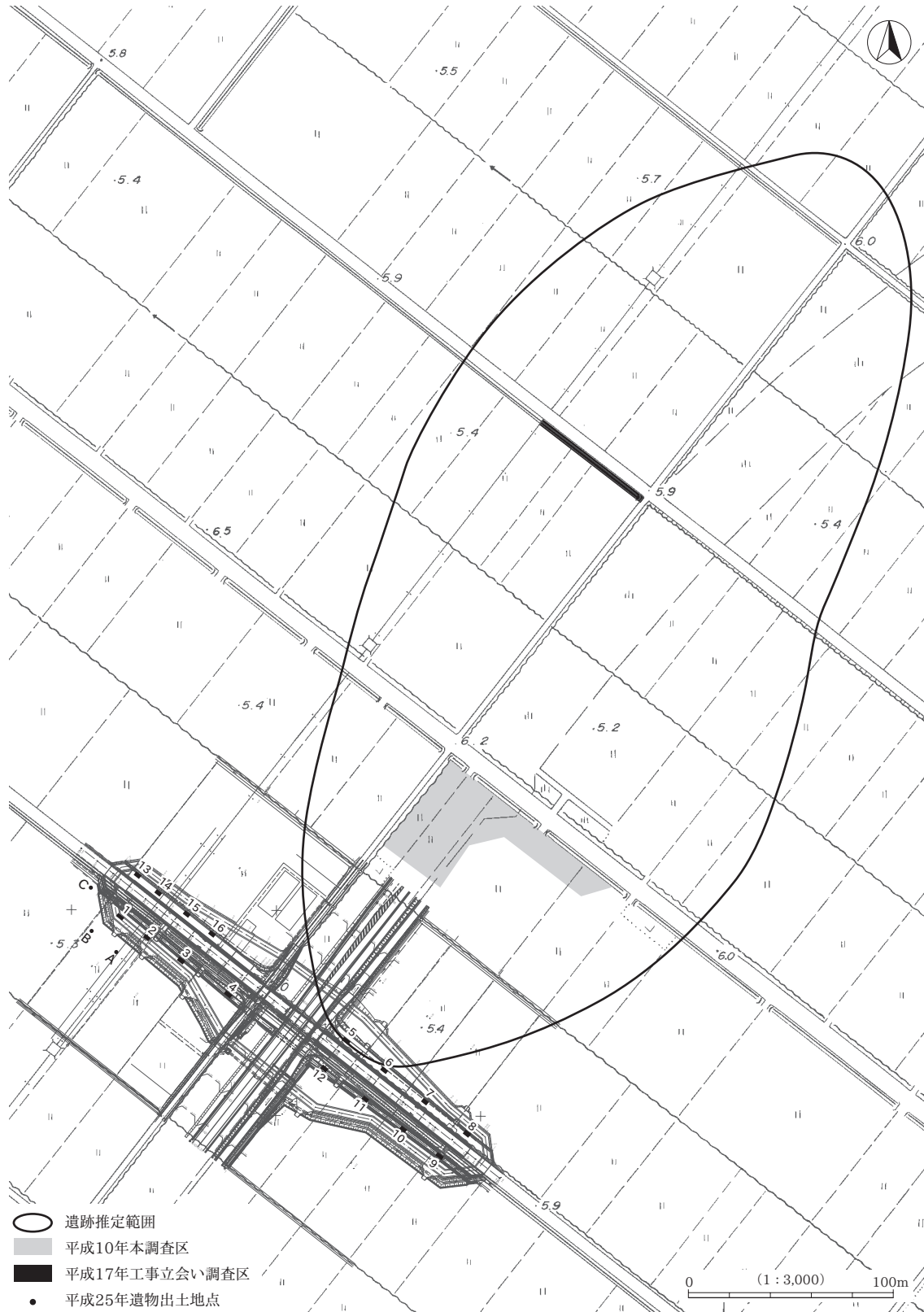
丸瀉遺跡は標高約5.4mの沖積地に立地し、水田面から約1.0m下で確認された〔伊藤1997a・1998〕。遺跡は平成7年の分布調査で発見され、平成8・9年の確認調査を経て、平成10年に国道403号三条北バイパス工事に伴い約2,550m²が発掘調査された。調査区からは柵列1条、溝4条、土坑7基、ピット2基が検出された。自然河道の可能性が高い1号溝から多量の古墳時代前期後半の土器と木製品が出土している〔伊藤・平岡ほか2000〕。平成17年には本調査区から北へ約150mの地点で排水路改良工事に伴う工事立会い調査を行い、古墳時代前期後半の土器が出土した〔伊藤2008〕。平成24年には本調査区域から南へ約100mの区域で確認調査が行われた〔伊藤2013〕（第2表）。

今回の確認調査は平成24年度からの継続で、残されていた一区画を対象とした。重機により約2.0m×3.5mのトレンチを掘削し、遺構・遺物の検出および土層堆積の確認を行った。必要な測量と写真撮影後、すぐに点圧しながら埋め戻しを行った。調査は4トレンチ、約27m²である。トレンチ番号は前年度からの連番とした。

調査年次	調査種別	調査原因	調査主体	調査面積 (m ²)	文献
平成7年(1995)	分布調査	新潟県詳細分布調査	新潟県教育委員会		
平成8年(1996)6	確認調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	140	伊藤1997a
平成9年(1997)4	確認調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	56	伊藤1998
平成10年(1998)9~12	本発掘調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	2,550	伊藤・平岡ほか2000
平成17年(2005)12	工事立会い	排水路改良工事	加茂市教育委員会		伊藤2008
平成24年(2012)5・12	確認調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	74.2	伊藤2013
平成25年(2013)5・10・12	確認調査・工事立会い	道路建設工事	加茂市教育委員会	27	本書

第2表 丸瀉遺跡調査履歴一覧表

2 丸瀉遺跡

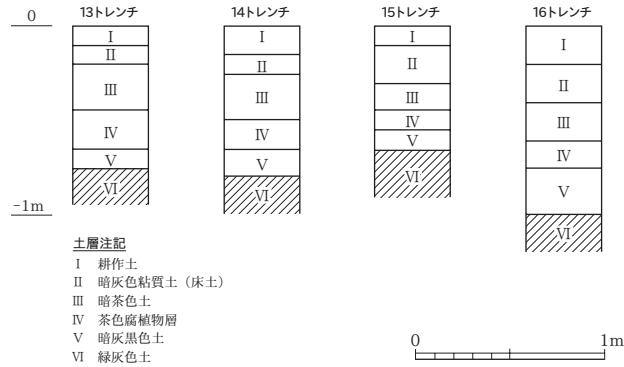


第2図 丸瀉遺跡推定範囲と確認調査トレンチ・立会い調査対象地位置図 (S=1:3,000)

(加茂市 平成4年印刷 [加茂市街図その7] S=1:2,500 原図)

(2) 層 序 (第3図)

各トレンチではほぼ同様の土層堆積状況が確認された。基本的にはI層水田耕作土、II層床土、III層暗茶色土、IV層茶色腐植物層、V層暗灰黒色土、VI層緑灰色土である。V層が古墳時代頃の遺物包含層、VI層が遺構確認面に相当すると考えられる。16トレンチ以外の13～15トレンチでは比較的浅いところでVI層が確認でき、周辺に比べて地形が安定した区域であったことが推測できる。



第3図 丸渦遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

(3) 遺構と遺物 (第4図)

13～16トレンチからは遺構・遺物ともに検出されなかった。

ここに報告する4点の木製品は工事立会い調査で出土したものである。工事立会い調査の対象地は昨年度調査した1～3トレンチの南西側にあたる。明確な出土層位は不明であるが、付近一帯に堆積している腐植物層より下位の土層から出土したものと見られる。出土地点は南からA・B・Cとした。

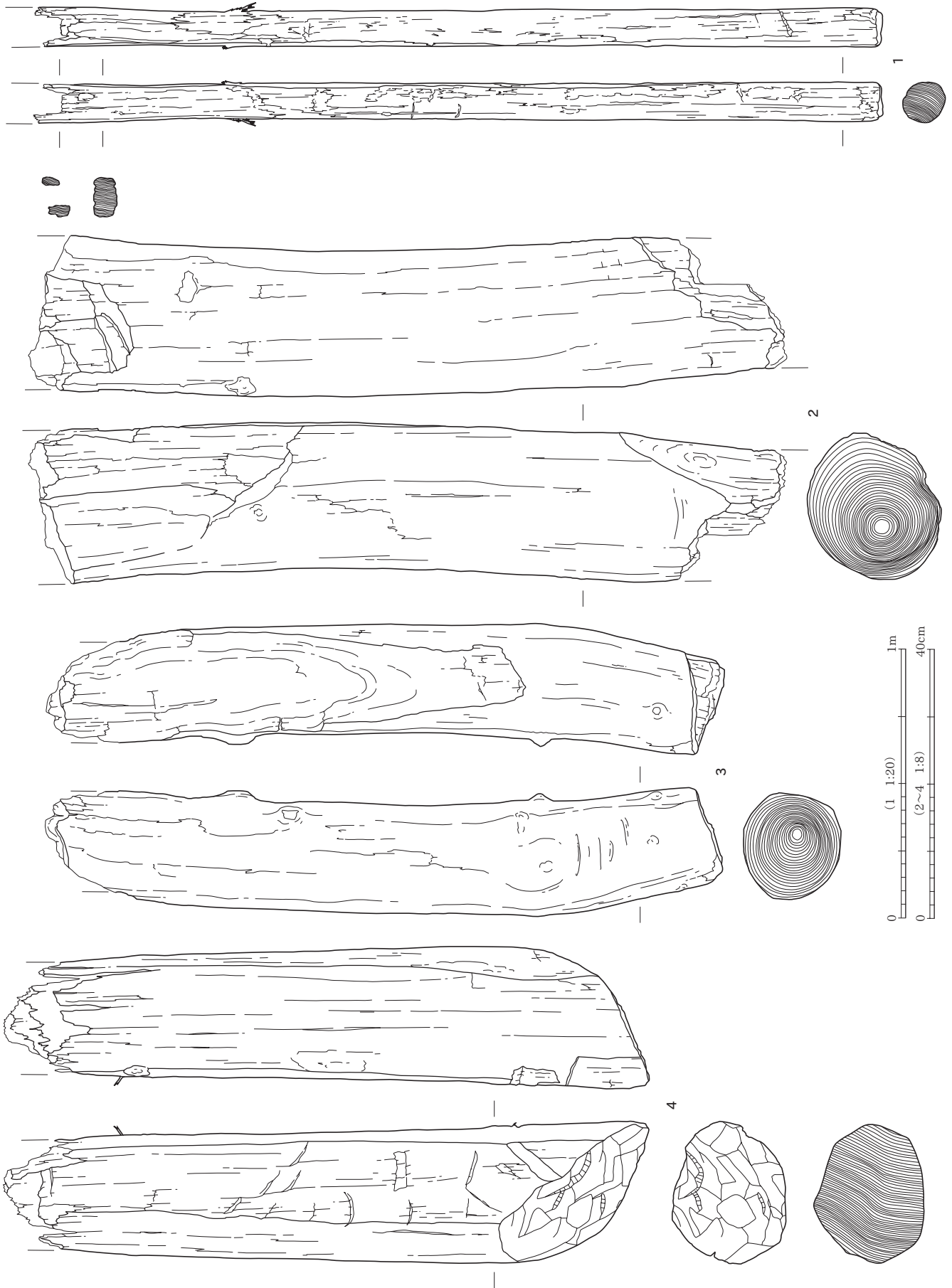
1はB地点から出土した。長さ316cmで、柱頭仕口が欠込む形の建築部材と見られる。欠込の深さは約10cmである。2～4はそれぞれB地点、A地点、C地点から出土した柱根である。2は上下両端部を欠損するが、下端部は尖るものと見られる。径22cmと太い。3も上下両端部を欠損する。節が見られる。径17.2cm。4は角柱でミカン割り材を利用している。下端は斜めで加工痕が顕著に見られる。径20.6cm。

これらの年代については共伴する土器がなく、詳細は不明である。ただし、4については後述(第V章)するように放射性炭素年代測定を行った結果、飛鳥時代～平安時代頃の所産の可能性はある。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域における調査可能深度内においては、遺構・遺物は確認できなかった。しかし、工事立会い調査で柱根などが出土し、周辺に何らかの建物跡が存在した可能性がある。特に4の柱根については出土位置や形状から昨年度の1トレンチから検出された柱2・3との関連性が考えられる。今のところ年代については自然科学分析に頼らざるを得ないが、示された較正年代値から飛鳥時代～平安時代に位置づけておきたい。今後も周辺の調査に留意したい。

2 丸渦遺跡



第4図 丸渦遺跡出土遺物

第三章 農業基盤整備事業関連

1 調査に至る経緯

農業基盤整備事業に関連し、1遺跡に対して確認調査を行った。事業は加茂郷土地改良区が主体で、計画区域について5月下旬に把握し、協議を開始した。事業は、五反田遺跡・中沢遺跡・鬼倉遺跡地内において計画された。五反田遺跡では、現況土水路のところを柵渠を布設し改良を行う工事、鬼倉遺跡では現況柵渠のところを床掘りし底打ちコンクリートを行う工事、中沢遺跡では現況土水路を重機で再掘削し、コンクリート2次製品の排水フリーム(400mm×300mm)を設置する工事内容であった。

文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出については、平成25年7月17日付け加土改第105号で加茂郷土地改良区理事長から新潟県教育委員会教育長宛てに出された。これを受けて市教委ではそれぞれ、現況と工事内容を考慮しながら、対応を判断した。その結果、五反田遺跡と鬼倉遺跡地内の工事については工事立会い調査、中沢遺跡地内の工事については掘削幅が約1.2mあることから確認調査が必要とした。埋蔵文化財の発掘については平成25年7月22日付け民資第141～144号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。その後、関係者と調整を行い調査の準備に入った。文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告について、平成25年10月18日付け民資第191号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。なお、確認調査後、2月中旬に工事立会い調査を実施した。

以下、中沢遺跡の確認調査を実施した結果について記す。

2 中沢遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要(第5・6図、第3表)

中沢遺跡は下条川右岸で市街地のある扇状地先端部から沖積地にかけて広がる。遺跡の推定面積は約27万m²である。現況はほとんどが水田である。

遺跡は平成7年に周知化された後、断続的に開発の波が押し寄せ、確認調査や本調査が行われてきた(第3表)。遺跡からは弥生時代～近世までの遺構・遺物が確認されているが、主体となる時期は弥生時代後期と奈良・平安時代である。

調査対象地は2地点ある。それぞれ延長約220mの現況土水路部分である。遺跡推定範囲の北部にある。現地表面の標高は約7～8mである。確認調査は、平成25年10月21日・23日に行われた。工事計画予定地内を対象として任意の坑を設定し、重機により約1.6m×1.7mのトレンチを12か所掘削し、遺構・遺物の検出および層序の確認を実施した。掘削の深度については、排水路改修工事の最深部を超えない程度としたが、部分的にそれ以上に掘り下げて、調査を行なった。調査終了後は転圧しながら埋め戻しを行った。調査面積は約32m²である。

(2) 層 序(第7図)

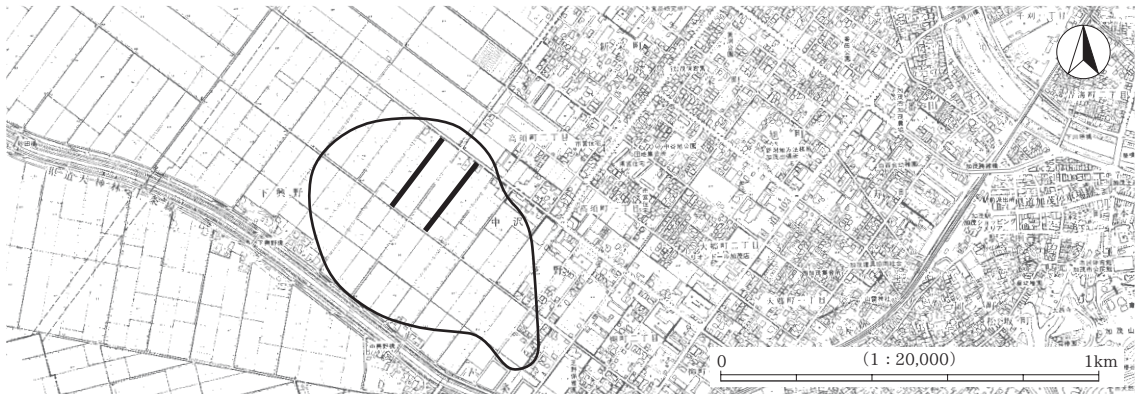
基本土層は、地点により異なるが、I層水田耕作土、II層暗茶色土、III層暗灰色粘質土、IV層暗灰黒色

2 中沢遺跡

土、V層暗黒色土、VI～VIII層腐植物層、IX層緑灰色土の堆積が認められる。V層が遺物包含層で3～5・7トレンチ周辺に確認できる。遺物包含層は3～5トレンチで地表面下約40cm、7トレンチで地表面下約50cmと比較的浅いところに確認できる。IX層が地山で遺構確認面である。

調査年次	調査種別	調査原因	調査主体	調査面積 (m ²)	文献
平成 7 年 (1995)	分布調査	新潟県詳細分布調査	新潟県教育委員会		
平成 8 年 (1996) 3	工事立会い	公共下水道工事	加茂市教育委員会		伊藤 1997b
平成 9 年 (1997) 12	確認調査	民間開発	加茂市教育委員会	340	伊藤 1998
平成 11 年 (1999) 5	確認調査	民間開発	加茂市教育委員会	130	伊藤 2000
平成 11 年 (1999) 6	本発掘調査	民間開発	加茂市教育委員会	630	
平成 11 年 (1999) 8・10	確認調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	90	伊藤 2000
平成 12・13 年 (2000・2001)	本発掘調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	1,610	伊藤 2001
平成 16 年 (2004) 1	試掘調査	民間開発	加茂市教育委員会	24	伊藤 2005
平成 16 年 (2004) 2	工事立会い	公共下水道工事	加茂市教育委員会		伊藤 2005
平成 18 年 (2006) 4	確認調査	民間開発	加茂市教育委員会	20	伊藤 2008
平成 22・23 年 (2010・2011) 10・11・3	確認調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	178	伊藤 2011b
平成 22 年 (2010) 10	確認調査	民間開発	加茂市教育委員会	3.5	伊藤 2011b
平成 23 年 (2011) 2	確認調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	13.3	伊藤 2011b
平成 24 年 (2012) 3	確認調査	道路建設工事	加茂市教育委員会	11	伊藤、立木 2012
平成 24・25 年 (2012・2013) 9・3	確認調査・工事立会い	民間開発	加茂市教育委員会	14.5	伊藤 2013
平成 25 年 (2013) 6	工事立会い	民間開発	加茂市教育委員会		本書
平成 25・26 年 (2013・2014) 10・2	確認調査・工事立会い	農業基盤整備事業	加茂市教育委員会	32	本書

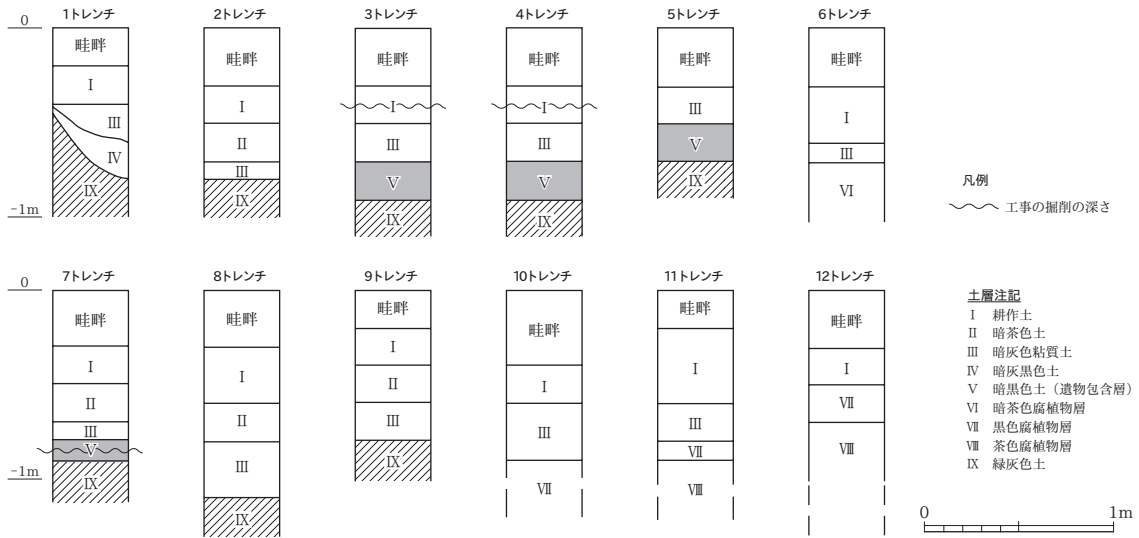
第 3 表 中沢遺跡調査履歴一覧表



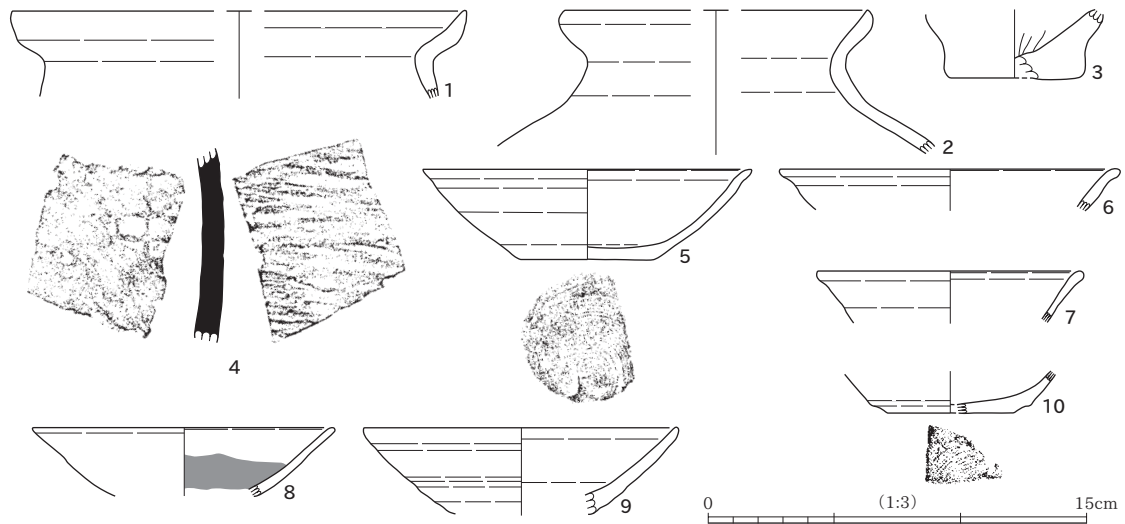
第 5 図 中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:20,000)
(加茂市 平成 20 年印刷 [加茂市街図] S=1:10,000 原図)



第 6 図 中沢遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:4,000)
(加茂市 平成 17 年印刷 [加茂市街図その 11] S=1:2,500 原図)



第7図 中沢遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)



第8図 中沢遺跡出土遺物

(3) 遺構と遺物 (第8図)

遺構は確認されなかったが、3・4トレンチから弥生土器が合計で13点、7トレンチから古代の土師器が50点出土した。また、7トレンチ周辺の工事立会いで古代の土器21点を採取した。

1～3は弥生土器である。1は甕の口縁部で、端部が上方に摘まれる。2は壺で口縁端部は丸く収められる。3は甕または壺の底部である。4は須恵器甕の体部である。5～10は土師器無台碗である。1～3は弥生時代後期後半、4～10は土師器無台碗が小ぶりであることや口縁端部の形から、春日編年VI～VII期〔春日1999〕で、概ね10世紀前半頃のものとして推測される。

(4) 調査のまとめ

今回の調査で、調査対象区域での遺物出土層位を把握できた。特に3・4トレンチ周辺で比較的浅い地層から弥生土器が出土することは留意する必要がある。なお、1～6トレンチ周辺の排水路改良工事の掘削深度は現況土水路底面から約10cm程であることから遺物包含層には影響しない。7～12トレンチ周辺の排水路改良工事の掘削深度は現況土水路底面から約60cm程であることから遺物包含層に到達する。慎重工事のうえ、立会い調査が必要と判断した。

第IV章 民間開発関連

1 調査に至る経緯

平成 24 年 7 月末に事業者から開発計画と埋蔵文化財の有無についての照会を受けた。携帯電話無線基地局設置工事の計画地は中沢遺跡推定範囲のほぼ中央部で、平成 24 年 9 月下旬に確認調査を実施した。その結果、現地表面下約 50 ～ 60cm に古代の遺物包含層が存在し、平安時代の遺物が散発的に出土した。しかし、明確な遺構は確認できず、本調査を実施するまでには至らなかった〔伊藤 2013〕。

その後、平成 25 年 6 月に鉄塔の本体工事が実施されることになり、慎重な掘削工事のもと、工事立会いを行い、遺物を採取し、遺構が検出された場合には必要な記録をとることとした。

2 中沢遺跡

(1) 遺跡と工事立会い調査の概要（第 9 図）

遺跡の概要や調査履歴などは第三章を参照のこと。

鉄塔基礎掘削工事に伴う立会い調査は平成 25 年 6 月 17 日、18 日、20 日に行った。作業員 3 名を配置し、掘削先と排土からも遺物の採取を行った。

(2) 遺構と遺物（第 10 図）

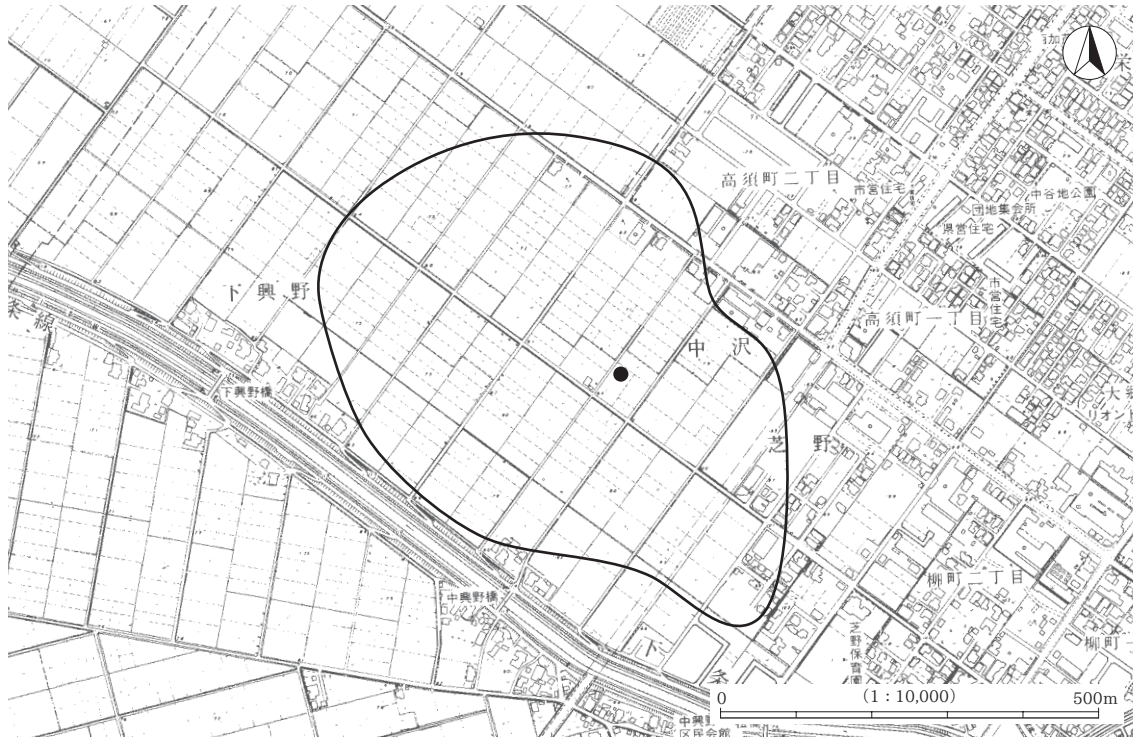
遺構は確認できなかつた。遺物は須恵器 5 点、土師器 35 点が出土した。

1 は須恵器横瓶で平成 24 年度報告の第 27 図 1 の破片と接合した。内外面ともに平行タタキと平行当て具痕が見られる。2 ～ 5 は土師器無台碗である。いずれも口縁端部が外反する。口径は 11.4 ～ 16cm まで見られるが、小振りのものが多い。2・3 はやや深身、4・5 は浅身である。5 の口縁端部内面の一部にタールが付着している。

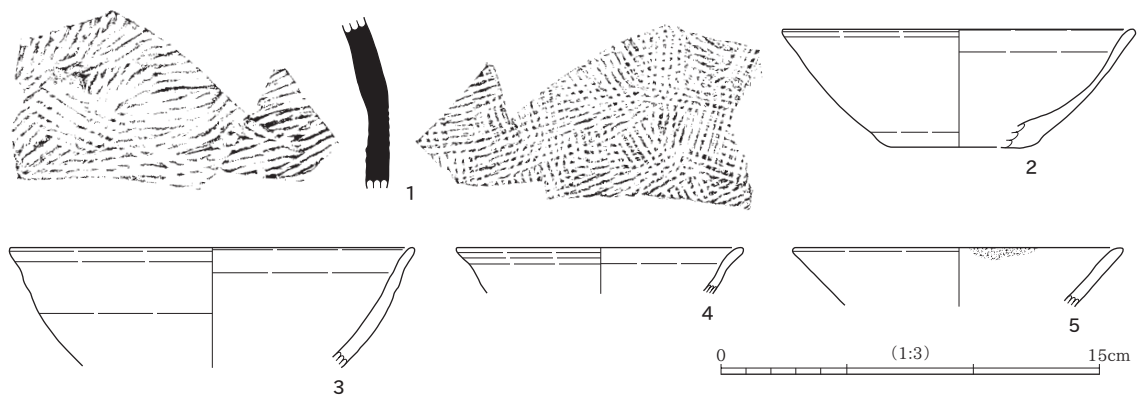
これらの土器は小振りな土師器無台碗や須恵器食膳具が見られないことから、春日編年 VI ～ VII 期〔春日 1999〕で、概ね 10 世紀前半頃のものとして推測される。

(3) 調査のまとめ

調査対象区域周辺ではこれまでの確認調査結果も踏まえると現地表面下約 50 ～ 60cm に 10 世紀前半頃の集落跡が広がることが理解できる。中沢遺跡では古代の集落は 8 世紀中頃から形成され、10 世紀前半まで継続することが知られているが、地点により集落形成の時期が異なることが知られる。今回の調査結果もそれを示している。



第9図 中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)
 (加茂市 平成20年印刷〔加茂市街図〕 S=1:10,000 原図)



第10図 中沢遺跡出土遺物

第V章 丸瀉遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

丸瀉遺跡（新潟県加茂市加茂）は、信濃川と後背の東山丘陵から流下する加茂川が形成した扇状地との間に分布する沖積地に立地する。本遺跡では、これまでの発掘調査により古墳時代の建物跡や木製品が多量廃棄された河道跡などが確認されているほか、トレンチによる確認調査では古墳時代あるいは古代と考えられる柱根なども確認されている。

本報告では、丸瀉遺跡の立会い調査の際に出土した木製品の年代や樹種の検討を目的として、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施した。

2 試料

資料は、丸瀉遺跡の立会い調査（A～C地点）より出土した木製品であり、部材1点（報告No.1）と柱根3点（報告No.2～4）からなる。各資料の詳細は後述する樹種同定結果とともに第5表に示す。

分析試料は、いずれも担当者により採取された木片であり、放射性炭素年代測定に供された木片（報告No.4）は残存する年輪外側より採取されている。

3 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は加速器質量分析（AMS）法で実施する。試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩など酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸などアルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩など酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma ; 68.3%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、

RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1 (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ、2σ (σ は統計的に真の値が 68.3%、2σ は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

各木片から剃刀を用いて木口 (横断面)・柁目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール (抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東 1982] や [Wheeler ほか 1998] を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、[林 1991] や伊東 [1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

4 結 果

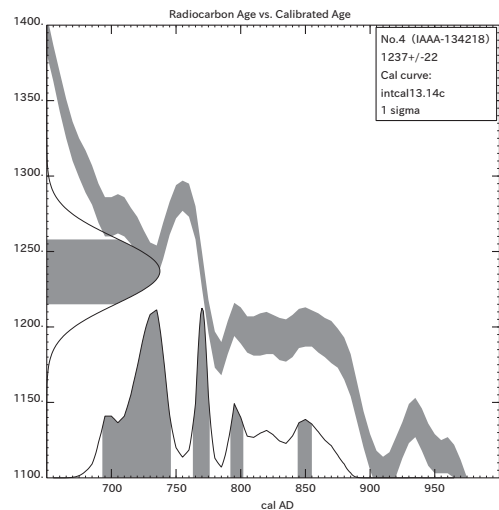
(1) 放射性炭素年代測定

柱根 (報告 No.4) より採取された木片の同位体効果による補正を行った測定結果 (補正年代) は 1240 ± 20yrBP、暦年較正結果 (測定誤差 σ) は calAD 693 - calAD 856 である (第 11 図、第 4 表)。

(2) 樹種同定

同定結果を第 5 表に示す。柱根および部材は、広葉樹 2 分類群 (クリ、トネリコ属) に同定された。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属
環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単



第 11 図 暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	δ 13C (%)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果			相対比	測定機関 CodeNo.	
報告 No.4 柱根 木片 (クリ)	1240 ± 20	-25.46 ± 0.40	1237 ± 22	σ	cal AD 693 - cal AD 746	cal BP 1257 - 1204	0.650	IAAA-134218	
					cal AD 763 - cal AD 777	cal BP 1187 - 1173	0.193		
					cal AD 792 - cal AD 802	cal BP 1158 - 1148	0.077		
					cal AD 844 - cal AD 856	cal BP 1106 - 1094	0.081		
					2σ	cal AD 688 - cal AD 753	cal BP 1262 - 1197		0.501
					cal AD 758 - cal AD 779	cal BP 1192 - 1171	0.163		
					cal AD 788 - cal AD 874	cal BP 1162 - 1076	0.336		

第 4 表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または 2 個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

報告 No.	出土地点	種別	法量 (cm)	木取り/形状	種類 (分類群)
1	B	部材	幅約 15, (残存) 長さ約 320	分割材/削出棒状	クリ
2	B	柱根	径約 22	芯持丸木	トネリコ属
3	A	柱根	径約 17	芯持丸木	トネリコ属
4	C	柱根	幅約 21	分割材/削出丸木	クリ*

* 放射性炭素年代測定試料

第 5 表 樹種同定結果

5 考 察

C 地点より出土した柱根 (報告 No.4) の放射性炭素年代 (補正年代) は 1240 ± 20 yrBP、較正暦年代 (1σ) は calAD 693 - calAD 856 であった。この結果を参考とすると、柱根は 7 世紀末から 9 世紀中頃の資料の可能性はある。

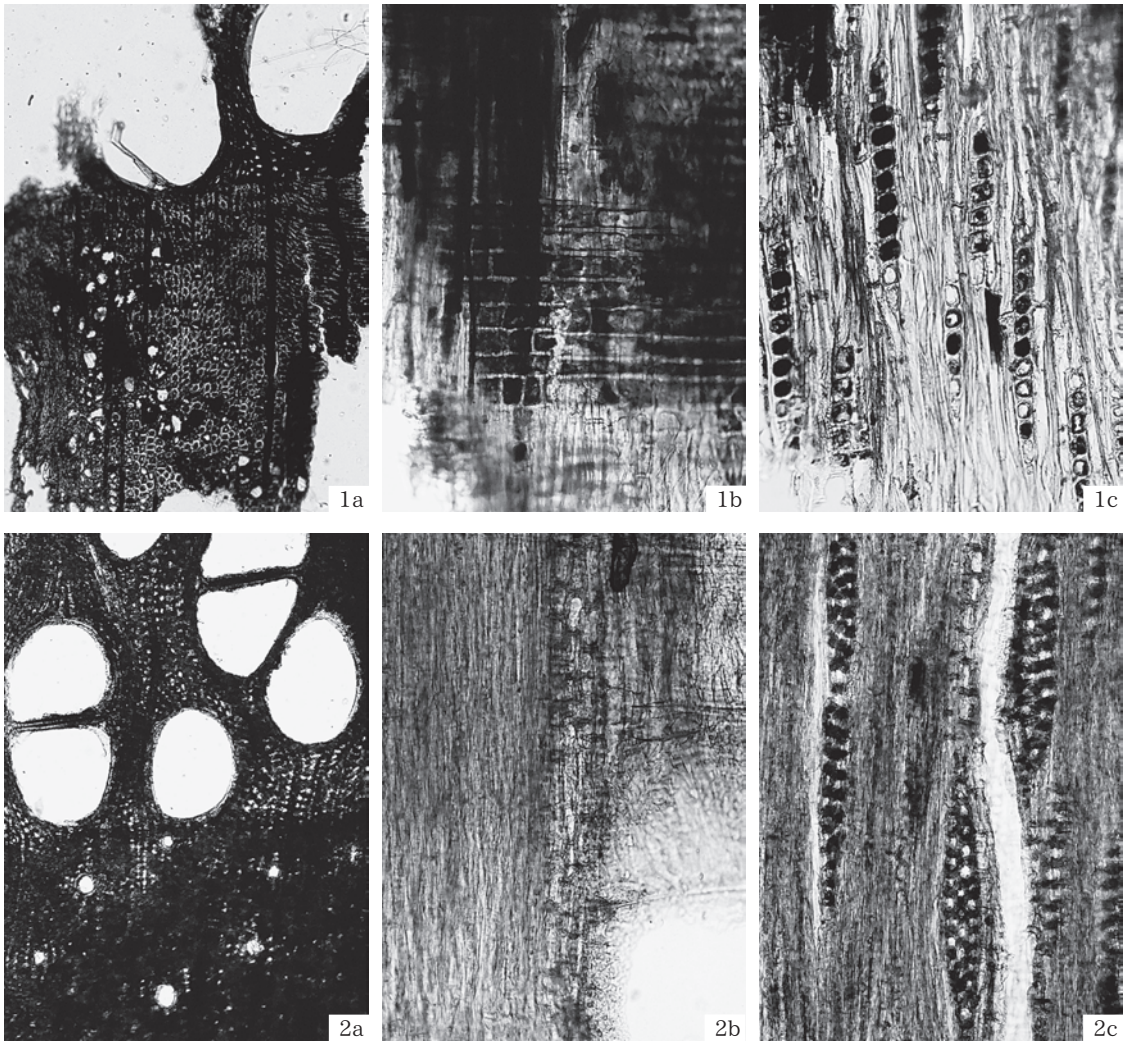
また、上記した柱根を含め、調査所見から同時期の資料と推定されている木製品 4 点には、落葉広葉樹のクリとトネリコ属が認められた。クリは、二次林などに生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度や耐朽性が高い。トネリコ属は、山地・丘陵地や河畔などに生育する高木であり、木材は比較的硬で強度が高い。なお、トネリコ属には、常緑性の種類も含まれるが、本地域には常緑性の種類は分布していないため、今回の資料に確認された種類は落葉性と考えられる。

柱根や部材の木取りや加工についてみると、部材 (報告 No.1) と柱根 (報告 No.4) は、ミカン割とした木材 (分割材) を断面が円形あるいは多角形に削出加工している。一方、柱根 (報告 No.2,3) はいずれも芯持丸木である。これらの状況と確認された樹種についてみると、前者の 2 点 (報告 No.1,4) がクリ、後者の 2 点 (報告 No.2, 3) がトネリコ属であり、いずれも強度が高い木材が利用される点で共通するが、種類によって加工方法が異なっている。前年度の丸瀉遺跡より出土した柱根の分析では、芯持丸木の資料がコナラ節、分割材の資料がクリであり、今回の結果と同様にクリが分割加工されるという特徴が指摘できる。なお、本遺跡の古墳時代前期とされる柱材には、オニグルミ、ケンポナシ属、トネリコ属、ヤマウルシが確認されている [伊東・山田 2012] が、クリの利用は認められない。今回の柱根より得られた年代を参考とすると、古墳時代前期と古代とでは木材の利用状況が異なる状況が窺え、さらに古代の柱根については樹種とその加工方法との間に共通する特徴が見出される。

加茂市域における古代の柱材の調査事例についてみると、馬越遺跡ではクリを中心にオニグルミ、アカメガシワ、カエデ属、トネリコ属、ケヤキなどが交じる組成、鬼倉遺跡でハンノキ垂属を中心にヤナギ属、アカメガシワ、クリ、ケヤキ、トネリコ属が交じる組成が確認されている [伊東・山田 2012]。また、馬越遺跡Ⅱでは、奈良時代とされる掘立柱建物の柱材に、クリを中心にカツラやトネリコ属などが交じる組成が確認されている [パリノ・サーヴェイ株式会社 2009]。この馬越遺跡Ⅱの柱材の樹種と加工方法についてみると、クリは全点が分割加工されており、カツラとトネリコ属にも分割加工される資料が含まれる。ただし、これらの分割加工される資料は、カツラやトネリコ属はミカン割状を呈するのに対し、クリはいずれも分割材を多角形あるいは丸木状に削出すという違いが見出せる。馬越遺跡Ⅱの柱材における樹種構成や柱材の樹種と加工方法の特徴は、今回の結果と概ね同様の傾向を示しており、当該期の木材利用として注目される。

引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 P81-181.
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 P66-176.
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 P83-201.
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 P30-166.
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 P47-216.
 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社 P449.
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2009 「平成18年度馬越遺跡の自然科学分析」『馬越遺跡Ⅱ 一般国道403号交通連
 携事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-』加茂市文化財調査報告書(18) 新潟県加茂市教育委員会 P48-53.
 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 P176.
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』伊
 東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 P122. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989,
IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. クリ (報告No.4)
 2. トネリコ属 (報告No.2)
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

100 μm : a
 100 μm : b, c

第12図 木材

第Ⅵ章 ま と め

本書に収録した試掘・確認調査および工事立会い調査は、丸瀉遺跡と中沢遺跡の2遺跡を対象とした。どちらの遺跡も過去に本調査が行われており、遺跡の性格の一端が明らかにされている。ともに沖積地に確認された重要な遺跡である。

丸瀉遺跡 今回の調査対象地からは、近接した地点で行われた本調査で確認されていた古墳時代前期頃の遺物包含層および遺構確認面に対比可能な土層を確認したが、遺跡の存在や年代を考えることのできる土器が全く出土しなかった。しかし、工事立会い調査で建築部材や柱根が4点出土し、詳細な出土層位は把握できていないが、昨年度の確認調査で出土した柱根と関連するものと思われる。なお、放射性炭素年代測定の結果は飛鳥～平安時代の年代を示し、周辺に古代の遺跡が展開する可能性を示している。このことを踏まえ、従来の主に古墳時代の遺跡推定範囲の南西側に拡大する形で遺跡範囲を追加登録することとした。ただし、土器が出土したり、表面採集できたりするわけではないので、遺跡の内容や広がりについては不明な点が多い。

また、柱根などの樹種と加工法の知見から、クリ材には分割材、トネリコ属には芯持ち丸木を用いるという選択的な利用法が窺え、樹種と加工法に相互関係があることが指摘できた。この現象は、昨年度の出土品についても類似した結果が得られており、今後ほかの遺跡で得られた出土例の検証を行いながら、調査研究の一視点として検討を続けたい。

中沢遺跡 中沢遺跡では遺構は確認できなかったが、弥生時代後期と平安時代の土器が出土した。既往の調査でも弥生時代後期の集落跡を発掘しているが、今回の調査対象地点とは直線距離にして約400m離れている。広範囲に弥生時代後期の集落が営まれた可能性がある。土器が出土する層位が地表面下約40cmと浅いところに存在したこととあわせ、今後周辺の開発に留意する必要がある。

平安時代の土器は、須恵器食膳具が見られないことや土師器無台椀の形態などから10世紀前半頃に位置付けられる。これまでの調査区からは8世紀中頃～9世紀前半、そして10世紀前半の集落がそれぞれ地点を違えて展開することが知られていたが、今回の調査結果からもその様相が裏付けられた。そして、今回の調査結果などを踏まえると、10世紀前半頃に集落面積が大きくなっていることが推測される。僅かな資料ではあるが、中沢遺跡における古代の時期別の変遷を考察するうえで貴重な成果である。

中沢遺跡は市内では数少ない複合遺跡であり、弥生時代後期と奈良・平安時代における地域史を語る上で重要な位置にある。弥生時代後期においては約1.5km離れた丘陵上にある宮ノ浦古墳周辺から同時期の土器が出土しており、高台にあるムラと低地にあるムラがどのように関連するのか注目される。奈良・平安時代においては、下条川流域にある馬越遺跡、太田遺跡、荒又遺跡と遺跡の存続期間がほぼ同じであることや遺跡の性格において官衙的な側面が見られることなど共通点が多く、古代の地域社会の動態を考える上で欠かせない遺跡である。

本書で報告した2遺跡の調査成果は必ずしも各遺跡の本質に迫る結果が得られたものではないが、個々の断片的な情報をつなぎ合せて、ほかの遺跡との比較検討を行い地域史を語らしめる資料としたい。そのためには、開発行為の大小に関係なく、真摯に埋蔵文化財行政を遂行することが必要であり、将来の研究に委ねる基礎資料として蓄積してゆくことが重要と考えている。

引用・参考文献

- 伊藤秀和 1997a 『加茂市文化財調査報告（7）平成8年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸瀧遺跡 鬼倉遺跡 馬越遺跡 蚊口太遺跡 寺屋敷遺跡 馬寄遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1997b 「加茂市中沢遺跡出土の土器について」『越佐補遺些』第2号 越佐補遺些の会
- 伊藤秀和 1998 『加茂市文化財調査報告（8）平成9年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸瀧遺跡 新通遺跡 馬越遺跡 上條館跡 中沢遺跡 石川遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2000 『加茂市文化財調査報告（11）平成11年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 たて屋敷遺跡 古見道遺跡 中沢遺跡 岩野原A遺跡 馬寄遺跡周辺地 山伏塚遺跡 舞台遺跡 横土居遺跡 稻荷裏遺跡 西吉津川遺跡 天神林地内』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2001 「加茂市下条中沢遺跡発掘調査速報」『加茂郷土誌』第23号 加茂郷土調査研究会
- 伊藤秀和 2005 『加茂市文化財調査報告（15）平成15年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 西吉津川遺跡 馬越遺跡 太田遺跡 寺下遺跡 城下遺跡 伝下屋敷館跡 割沢遺跡 中沢遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2008 『加茂市文化財調査報告（17）平成17年度 平成18年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸瀧遺跡 五反田地区 中沢遺跡 草生津遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2011a 『加茂市文化財調査報告（21）荒又遺跡 太田遺跡－県営ほ場整備事業吉津川地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2011b 『加茂市文化財調査報告（22）平成22年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 たて屋敷遺跡 元狭口遺跡 中沢遺跡 後須田地区』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2013 『加茂市文化財調査報告（24）平成24年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 新通遺跡 丸瀧遺跡 館屋敷館跡 元狭口遺跡 大塚遺跡 花立遺跡 舞台遺跡 釜淵遺跡 宮寄上地内 中沢遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和・平岡和夫^{ほか} 2000 『加茂市文化財調査報告（10）丸瀧遺跡・新通遺跡－国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和・立木宏明 2012 『加茂市文化財調査報告（23）平成23年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 馬越遺跡周辺地 元狭口遺跡 中沢遺跡 鬼倉遺跡 丸山遺跡 花立遺跡 舞台遺跡 たて屋敷遺跡周辺地 太田遺跡 横江遺跡』 加茂市教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1997 『新版 標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修
- 春日真実 1999 「第4章－第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院
- 春日真実 2008 「越後における古墳時代～中世の柱材について」『新潟考古』第19号 新潟県考古学会
- 春日真実 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第228集 一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅷ 北陸新幹線関係発掘調査報告書XXII 山岸遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宮本長二郎 2007 『日本の美術 No.490 出土建築部材が解く古代建築』 至文堂

別 表

凡 例

木製品

- 1 法 量 太さは節部の張り出した部分以外の最大径を計測した。
- 2 木取り [春日 2008] を参考にした。
- 3 断面形 [春日 2012] を参考にした。
- 4 底面形 [春日 2012] を参考にした。

土 器

- 1 法 量 括弧付きの数値は遺存率が低く、推定値を含む。
- 2 残存率 ※ /36 で残存割合を示した。
- 3 含有物 土器の胎土中に含まれる鉱物などについて記した。「石」は石英粒、「長」は長石、「砂」は砂粒、「海針」は海面骨針を表す。
- 4 焼 成 観察者の主観的判断で「良好」、「並」、「不良」に分類した。
- 5 色 調 『新版標準土色帖』[小山・竹原 1997] の記号を記した。
- 6 手 法 特徴的な手法のみ記した。
- 7 備 考 主に付着物や須恵器産地を記した。

別表 1 丸渦遺跡 木製品観察表

図 No.	報告番号	種別	樹種	法 量 (cm)			木取り	断面形	底面形	備 考
				長さ	太さ	厚さ				
4	1	部材	クリ	316.0	14.5		芯去りミカン割?	円形・方形	平坦	B地点出土
4	2	柱根	トネリコ属	113.0	22.0		芯持ち丸木	円形	(尖底)	B地点出土
4	3	柱根	トネリコ属	101.0	17.2		芯持ち丸木	円形		A地点出土
4	4	柱根	クリ	96.3	20.6		芯去りミカン割	多角形	斜め	C地点出土、年代測定

別表 2 中沢遺跡 土器観察表 (1)

図 No.	報告番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			器高指数	底径指数	残存率		胎 土含有物	焼成	色 調		手 法			回転方向	備 考
				口径	底径	器高			口縁	底部			外面	内面	外面	内面	底部		
8	1	弥生土器	甕	(18.0)					1/36		石・砂	並	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ			3トレンチ
8	2	弥生土器	甕	(12.0)					1/36		石・砂	並	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ			3トレンチ
8	3	弥生土器	壺		5.0					10/36	石・砂	並	2.5YR6/6 橙	10YR6/2 灰黄褐					3トレンチ
8	4	須恵器	甕								石・長	並	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	平行タタキ	格子当て具			
8	5	土師器	無台椀	13.0	5.2	3.6	28	40	4/36	25/36	石・長	並	5YR8/3 淡橙	10YR8/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	7トレンチ
8	6	土師器	無台椀	13.5					4/36		石・砂	並	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ			7トレンチ
8	7	土師器	無台椀	10.5					5/36		石・長 ・海針	並	5YR7/6 橙	10YR3/1 黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面スス
8	8	土師器	無台椀	12.0					5/36		石・砂	並	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ			内面漆?付着
8	9	土師器	無台椀	12.5					3/36		石・砂	並	10YR7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			7トレンチ
8	10	土師器	無台椀		5.0					7/36	石・砂	並	2.5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	7トレンチ

別表 3 中沢遺跡 土器観察表 (2)

図 No.	報告番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			器高指数	底径指数	残存率		胎 土含有物	焼成	色 調		手 法			回転方向	備 考
				口径	底径	器高			口縁	底部			外面	内面	外面	内面	底部		
10	1	須恵器	横瓶								石・長	並	10YR4/1 褐色	5Y6/1 灰	平行タタキ	平行当て具			小泊窯産
10	2	土師器	無台椀	14.0	5.6	4.7	34	40	7/36	8/36	石・砂	並	2.5YR7/3 淡赤橙	5YR8/3 淡橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
10	3	土師器	無台椀	16.0					1/36		石・砂	並	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
10	4	土師器	無台椀	11.4					4/36		石・長 ・海針	並	2.5YR7/4 淡赤橙	2.5YR7/4 淡赤橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
10	5	土師器	無台椀	13.0					3/36		石・長	並	5Y2/1 黒	2.5Y2/1 黒	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面ター ル付着

写真図版



丸渦遺跡 調査地遠景（南東から） ※中央部は平成10年発掘調査区域



丸渦遺跡 調査地近景（北西から）



丸渦遺跡 調査地近景（南東から）



丸渦遺跡 13 トレンチ調査風景（北西から）



丸渦遺跡 16 トレンチ調査風景（南東から）



丸瀉遺跡 13 トレンチ土層断面 (南東から)



丸瀉遺跡 13 トレンチ深掘り土層断面 (南東から)



丸瀉遺跡 14 トレンチ土層断面 (南西から)



丸瀉遺跡 15 トレンチ土層断面 (南東から)



丸瀉遺跡 16 トレンチ土層断面 (北西から)



丸瀉遺跡 調査地近景 (南東から)



丸瀉遺跡 調査風景 (北から)



丸瀉遺跡 調査風景 (北から)



4 底面アップ
(縮尺は任意)

1 [1:20]
2~4 [1:8]

丸渦遺跡 出土遺物



中沢遺跡 調査地遠景（南東から） ※手前は平成13年発掘調査区域



中沢遺跡 1～6トレンチ調査地近景（南西から）



中沢遺跡 7～12トレンチ調査地近景（南西から）



中沢遺跡 2トレンチ調査風景（西から）



中沢遺跡 9トレンチ調査風景（南西から）



中沢遺跡 1 トレンチ土層断面 (南西から)



中沢遺跡 2 トレンチ土層断面 (北西から)



中沢遺跡 3 トレンチ土層断面 (南東から)



中沢遺跡 4 トレンチ土層断面 (南東から)



中沢遺跡 5 トレンチ土層断面 (南東から)



中沢遺跡 6 トレンチ土層断面 (南東から)



中沢遺跡 7 トレンチ土層断面 (北西から)



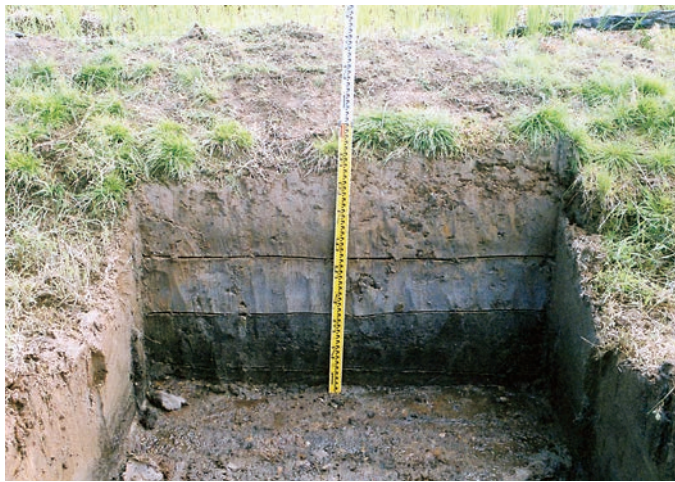
中沢遺跡 8 トレンチ土層断面 (北西から)



中沢遺跡 9 トレンチ土層断面 (北西から)



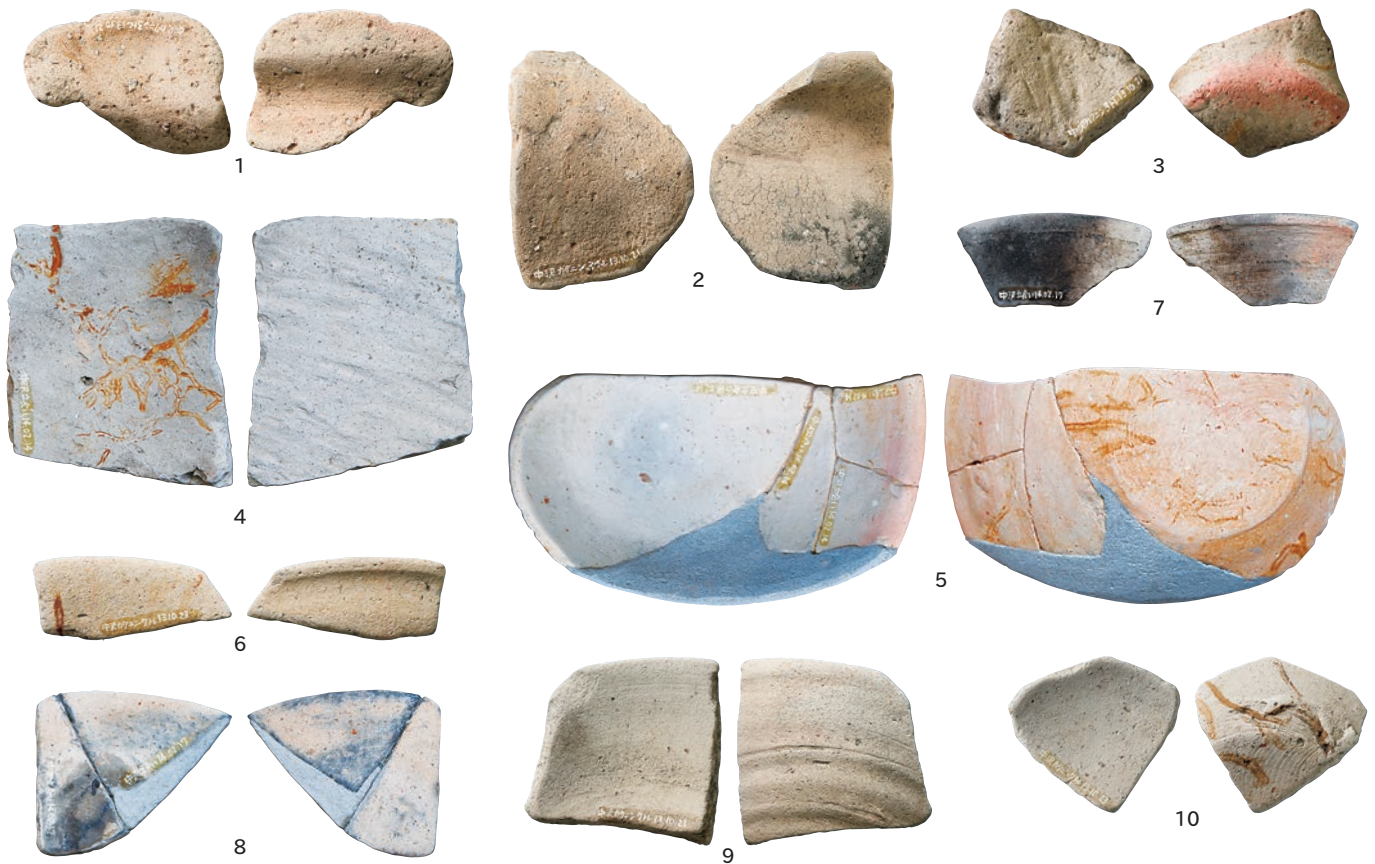
中沢遺跡 10 トレンチ土層断面 (北西から)



中沢遺跡 11 トレンチ土層断面 (北西から)



中沢遺跡 12 トレンチ土層断面 (北西から)



中沢遺跡 出土遺物 [1:2]



中沢遺跡 調査風景（南から）



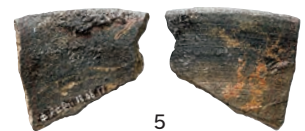
中沢遺跡 調査風景（南から）



中沢遺跡 調査風景（南から）



中沢遺跡 調査風景（南西から）



中沢遺跡 出土遺物 [1 : 2]

報告書抄録

ふりがな	かもしないいせきかくにんちようさほうこくしよ							
書名	平成 25 年度 加茂市内遺跡確認調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告 (25)							
編著者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会 社会教育課							
所在地	〒 959-1392 新潟県加茂市幸町 2 丁目 3 番 5 号 TEL (0256) 52-0080							
発行年月日	西暦 2014 年 9 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まるがたいせき 丸 瀧 遺 跡	かもしおおあざかも 加茂市大字加茂 あざごたんだ 字五反田 2696-1 番地ほか	15209	125	37 度 40 分 07 秒	139 度 01 分 53 秒	20130404 ~ 20130410 20130509 20131106 ~ 20131109	27	道路建設工事
なかざわいせき 中 沢 遺 跡	かもしおおあざげじょう 加茂市大字下条 あざなかざわおつ 字中沢乙 385 番地	15209	119	37 度 39 分 28 秒	139 度 02 分 01 秒	20130617 ~ 20130620	32	農業排水路改良工事
						20131021 20131023 20140214 20140217		携帯電話基地 局建設工事
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
丸 瀧 遺 跡	集落跡	古墳				柱根		
中 沢 遺 跡	集落跡	弥生・古代				土師器、須恵器		

加茂市文化財調査報告 (25)	
平成 25 年度	
加茂市内遺跡確認調査報告書	
丸 瀧 遺 跡	
中 沢 遺 跡	
印刷年月日	平成 26 年 9 月 25 日
発行年月日	平成 26 年 9 月 30 日
発行・編集者	加茂市教育委員会 〒 959-1392 新潟県加茂市幸町 2 丁目 3 番 5 号 TEL 0256 (52) 0080
印刷所	有限会社 いたう印刷 〒 959-1378 新潟県加茂市駅前 4 番 4 号 TEL 0256 (52) 0696